九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[123]語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/1932371

出版情報：語文研究. 123, 2017-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

若木太一・高橋昌彦・川平敏文　編

『長崎先民伝注解――近世長崎の文苑と学芸――』

本書は、盧草拙稿・盧千里編『長崎先民伝』（二巻二冊、文政二年〈一八一九〉刊）の本文を影印・翻刻し、詳しい語注と校異を付し、解説を加えたものである。本書の構成は以下の通り。（本編の詳細は割愛した）

口絵
はじめに　川平　敏文
凡例
本編
附録
　盧草拙『嘻嘗録』（影印）
　盧千里『勉斎遺稿　盧氏筆乗』（影印）
解説
　盧氏の系譜　若木　太一
『長崎先民伝』の諸本について　高橋　昌彦
あとがき　川平　敏文
長崎先民伝研究会メンバー略歴
索引

『長崎先民伝』は、近世前期に長崎の地に生きた学者・僧侶・市井の人々、あるいはそこに来遊した中央の学者・文人たち総勢一四七名の伝記を、一三のジャンル（学術・談天・善者・忠孝・貞烈・処士・隠逸・任侠・医術・通訳・技芸・緇林・流寓）に部類分けしつつ、漢文体で記したものである。

『長崎先民伝』には、長崎の地において一級の技芸をもって身を立てた人々や、長崎に生まれ後に中央で活躍した学者たちの、他書には見られない逸話が満載されている。とりわけ、本書によってしか、その存在や伝記が確かめられない人物も数多く、その意味で、本書は近世前期長崎学の基礎的かつ最重要の資料と言える。

しかし本書の価値は、長崎学という郷土研究にのみあるものではない。すなわち、長崎という地に関心を寄せ、中央から「流寓」（来訪）した者たちの伝記についても知ることができるという点で、長崎と中央の人的ネットワークや文化交流など、本書を通して得られる情報はけっして少なくないのである。

本書は、近世の長崎という場所が、西国の僻地という地理的条件にもかかわらず、いかに多くの魅力的な人材を輩出したか、また中央の人々がこの地にいかに強い文化的な関心を持っていたかを窺い知る上で、今後欠かせない資料となるは

ずである。

また附録として、盧草拙『喰藝録』および盧千里『勉斎遺稿　盧氏筆乗』の影印も収録されている。これにより、盧氏二代の学問と文事が、広く学界に探究される準備が整ったと言えよう。

（平成二十八年十一月　勉誠出版　B5判　三〇〇頁　一〇、〇〇〇円＋税）

菱岡憲司　著
『小津久足の文事』

本書は、小津久足（号桂窓、一八〇四～一八五八）の文事について、人物、歌業、紀行文の三つの部を立てて論じる。本書の構成は以下の通り。（節は割愛した）

はじめに
序章――小津久足の文事――
一部　小津久足の人物
一章　若き日の小津久足
二章　馬琴と小津桂窓の交流
三章　一匹狼の群れ
二部　歌業
一章　小津久足の歌稿について
二章　後鈴屋社中の歌会
三章　小津久足の歌人評
四章　小津久足の歌がたり
五章　翻刻『桂窓一家言』
三部　紀行文点描
一章　小津久足の紀行文
二章　御嶽の枝折
三章　花鳥日記
四章　神風の御恵
五章　陸奥日記
六章　難波日記
七章　松陰日記
あとがき
初出一覧
人物・書名索引

小津久足は伊勢松坂の人で、「湯浅屋」六代目、干鰯問屋を営んだ豪商であり、「馬琴三友」の一人として知られる。また、本居春庭に入門し、後鈴屋社中で頭角をあらわした人物でもある。彼の文事には、紀行・詠歌・蔵書・小説受容の四つの柱が見出せ、本書ではこれらのうち、とくに研究の蓄積のすくない紀行・詠歌に焦点を当てる。

第一部では、久足の生い立ち、春庭入門から春庭の息子有郷を後見するまでの事蹟を追いかける。また、久足と馬琴の交流についても論じ、その二人の関係は、馬琴による小説読解法の一方的な教授に留まることなく、久足が『侠客伝』の誤りを馬琴に気付かせる指摘を行うなど、見識を持った人物同士として、得意とするところを伝え合う相補的な関係にあったことを明らかにする。

第二部では、後鈴屋社中について、歌会の変遷、歌会の様子などを考察し、常連として出詠を続けた久足を例に、春庭が行った和歌の指導について論じる。そして、久足の歌論書である『桂窓一家言』の特徴を概観し、久足の詠歌作法や、本居宣長批判と『源氏物語』批判の内実を検討し、その特異な歌論の背景について考察を行う。なお、久足の宣長批判は、以下に述べる彼の〈古学離れ〉以後の紀行文にも散見される。

第三部では、久足の紀行文の変遷について論じる。春庭入門当初の久足にとって、紀行文執筆は、国学の研鑽が目的であったが、『花鳥日記』を境として、久足は古学の門人としての自主規制を廃する。そして、古今和漢雅俗にこだわらない自由闊達な物言いをその紀行文中に書き記すようになり、この変化を、著者は〈古学離れ〉と称す。また、久足紀行文の中から『御嶽の枝折』『花鳥日記』『神風の御恵』『陸奥日記』『難波日記』『松陰日記』の六つを取り上げ、その特徴を紹介する。

本書によって、久足の紀行・詠歌について明確に把握できるようになり、ひいては彼の文化的営為の全容を明らかにすることも可能となるはずである。

（平成二十八年十一月　ぺりかん社　A5判　三〇八頁　五、四〇〇円＋税）

青木博史　著
ひつじ研究叢書〈言語編〉第145巻
『日本語歴史統語論序説』

本書は、日本語を対象として統語論的観点からのアプローチを行い、古典語から現代語への歴史変化をダイナミックに描くことを目的とした歴史統語論的研究の序説である。本書の構成は以下の通り。（節以下は割愛した）

序　章　歴史統語論の方法
第一章　名詞の機能語化
第二章　述部における節の構造変化と文法化
第三章　「句の包摂」と文法化
第四章　文法化と主観化
第五章　項における準体句の歴史変化
第六章　述部における名詞節の歴史

第七章　接続助詞「のに」の成立
第八章　条件節における準体助詞「の」
第九章　終止形と連体形の合流
第十章　「こと」の機能
第十一章　原因主語他動文の歴史
第十二章　ミ語法の構文的性格
第十三章　複合動詞の歴史
第十四章　クル型複合動詞の史的展開
終　章　まとめと今後の課題
参考文献
使用テキスト
あとがき
索引

本書の特色としては、まず「名詞」に注目している点が挙げられる。文中で果たす名詞の統語的振る舞いは、言語のしくみを考えるうえできわめて重要である。また、名詞という範疇から転じ、文法語となる変化を文法化の事例として紹介するだけでなく、文法変化がいつ、なぜ、どのようにして起こったのかを必要十分な形で説明することを重要な課題と捉えている。

次に、「準体句」の歴史変化に関して新たな解釈を示しており、これは現代語の記述的研究の進展を背景としたもので、歴史変化を記述するにあたって現代語研究の成果を参照し、理論的研究や類型的研究と同じ土俵に乗せている。その一方で、「当時の人々の使用意識」にも注意を払い、使用する人間からかけ離れた理論的に過ぎる解釈は言語変化の説明として妥当ではないという、先学によって積み重ねられてきた歴史観を継承している。また、統語論的観点を用いているが、統語情報ばかりでなく意味への注意も向けており、実例に即して意味変化についても全体を通じて丁寧な記述を行っている。

文献に見られる言語の「位相」をどのように解釈するかという課題についても「原因」が主語となる他動文や、「ミ語法」の構文を通じて提示しており、文献学と一体となった方法論が全体を通じて実践されている。また「複合動詞」の問題について現代日本語の理論的・記述的研究に加え、朝鮮語など他言語の研究成果の観点も含めている。

本書全体を通じて、歴史統語論についての方法論を述べるのではなく個々の具体的な言語分析を以て歴史統語論を示している。

（平成二十八年十一月　ひつじ書房　A5判　二六八頁　七、二〇〇円＋税）

青木博史・小柳智一・高山善行　編

『日本語文法史研究　3』

本書は、日本語文法の歴史的研究をテーマとする論文集の第三号である。本書の構成は以下の通り。

はしがき
名詞の語形変換――接尾辞における母音交替――　小柳　智一
中古語ニヤアラムの淵源　近藤　要司
ケム型疑問文の特質――間接疑問文の史的研究のために――　高山　善行
「べし」の否定形式の主観的用法――「否定推量」の発生と定着――　藤井　俊博
〈聞き手領域〉に関わるア系列の指示――中世を中心に――　藤本真理子
逆接確定条件表現形式の推移についての一考察――中世後期から近世にかけて――　宮内佐夜香
上方語における分裂文の歴史的変化　坂井　美日
ダケノ句の史的展開――副助詞句の名詞性――　宮地　朝子
現代日本語における左方転位構文のタイプと起源　竹内　史郎
「-おく」の歴史的変遷――韓国語「-twuta」との対照を視野に入れて――　一色　舞子
ナロック・ハイコ
【テーマ解説】文法化
【テーマ解説】コーパス　小木曽智信
【文法史の名著】関一雄著『国語複合動詞の研究』青木　博史
日本語文法史研究文献目録二〇一四-二〇一五
索引・執筆者紹介

本書の構成は、創刊号、第二号を継承する形で、研究論文十編に加え、「テーマ解説」二編、「書評」一編を載せ、巻末に直近二年分の文法史関係の「研究文献目録」を付している。

各論文の時代、テーマ、アプローチの仕方は多岐にわたっているが、いずれの論文も、本書の掲げる「日本語文法史研究の発展に貢献するべく、最新の成果を発信する」という使命に基づいて執筆されている。

「テーマ解説」では、現在最も旬な話題である「文法化」と「コーパス」について最前線の研究を基にわかりやすい解説がなされている。

「文法史の名著」では、関一雄著『国語複合動詞の研究』が取り上げられている。今日的な目から見ても、きわめて重要な成果が数多く示されており、近年再び注目を集めている複合動詞研究の基礎として取り上げるべき名著である。

本書は、創刊号、第二号を質量ともに継承しつつ、日本語文法史に新たな切り口から迫った一冊となっている。

（平成二十八年十二月　ひつじ書房　A5判　三一〇頁　三、二〇〇円＋税）

入口敦志　著
ブックレット〈書物をひらく〉2
『漢字・カタカナ・ひらがな――表記の思想』

本書は、国文学研究資料館が取り組む、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築」（歴史的典籍NW事業）における研究成果を広く発信する目的で発刊された、ブックレット〈書物をひらく〉シリーズの第二巻である。本書の構成は以下の通り。

はじめに
一　『古今和歌集』の意義
二　四つの『平家物語』
三　医学書の表記
四　山鹿素行から本居宣長へ
おわりに
あとがき

日本語は表記の複雑な言語である。漢字・カタカナ・平仮名の三種類の文字を使っての表記に加えて、漢字カタカナ交じり、ひらがな漢字交じりなど、それぞれを組み合わせた多彩な表記の方法を用いることが出来る。また、漢字のみで書かれた漢文を読むことが出来る階層、平仮名しか読むことが出来ない階層など、教養や身分などによって、どのような文字を使うかということも大きく異なってくる。入口氏は、漢字・カタカナ・平仮名をどのように用いるかということは、単に文字の選択という問題のみではなく、その背景にある人間社会の構造が深く関わっていると述べる。

本書においては、書かれた文章の内容だけではなく、その文章が書かれるにあたって何故この表記が選択されたのかという点に着目し、四つの章を立てて具体的な文献や人物を挙げながら解説がなされる。真名本、カタカナ本、平仮名本、ローマ字本の四つの『平家物語』や、平仮名で表記されている医学書『延寿撮要』からは、それらを享受していた人々の位相や筆者の執筆態度を窺うことが出来る。また、漢字と平仮名との間にあった序列のために生じる漢文の呪縛から平仮名が解き放たれていく過程のドラマがそこには描かれている。

加えて本書は、頭注や古典籍からの引用文に逐一丁寧に解釈が付されるなど、初学者であっても親しみやすく理解しやすいものとなっている。

入口氏は、韓国におけるハングル統一の運動やチュノムや漢字を使用しないベトナムの現状を例に挙げて、我々も日本

語の表記についてもっと深く突き詰めて考えるべきではないかとの問題提起を行っている。本書を通じて、普段何気ない意識のもとに使っている、日本語における多彩な表記の仕方について、幅広い人が学び、自らも考えるきっかけとすることが出来るはずである。

（平成二十八年十二月　平凡社　A5判　九〇頁　一、〇〇〇円＋税）

飯倉洋一　編
『アプリで学ぶくずし字――くずし字学習支援アプリ KuLA（クーラ）の使い方』

本書は、くずし字学習支援アプリ KuLA の使い方を紹介するガイドブックである。本書の構成は以下の通り。（節は割愛した）

はじめに――くずし字は絶対に読めるようになる！
1　アプリで何ができるのか？
2　アプリを使いこなそう！
3　KuLA 以外の学習方法は？
4　オンライン座談会　刀剣ゲームファンが KuLA でくずし字を学ぶ！
5　アプリ活用法＆くずし字を学ぶということ
6　【付録】「よむ」資料『しん板なぞなぞ双六』注釈
あとがきにかえて
執筆者＆スタッフ一覧

本書はスマートフォンやタブレットで、くずし字を手軽に学べる、くずし字学習支援アプリ“KuLA”（Kuzushi-ji Learning Application）のガイドブックである。KuLA の使い方を図説するとともに、KuLA 以外の学習方法、刀剣ファンや大学・美術館関係者のアプリ活用方法、くずし字教育の現状などを紹介する。

KuLA は、平成二十七～二十八年度科研挑戦的萌芽研究「日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発」（代表・飯倉洋一教授）の成果として、大阪大学文学研究科を中心に開発された。日本の古典籍の画像データベースサービス・デジタル化が速やかに展開している中、古典籍の原本や画像へのアクセスがとても便利になっている。これらの原本・画像の中で、活字化されていないものが多くある。くずし字と変体仮名が解読できなければ、これらの古典籍を読めないのである。今までのくずし字学習は、実際にくずし字が読める人に直接ついて学ぶのが有効とされてきた。独学が難しかったといえる。古典籍を読む必要のある研究者や、海外で日本古典文学を学ぶ学生などは、くずし字を読みたくても学ぶ方

法が限られている。

そこで大阪大学文学部研究科を中心としたこの研究チームは、一人で学べ、かつ仲間とともに教え合うこともできる、くずし字学習支援アプリの開発を企画した。この研究は、文学研究科「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築クラスター」、国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」、科研挑戦的萌芽研究「日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発」の３つのプロジェクトが連携している。

KuLA が提供するテスト機能やソーシャル機能を使えば、一人では難しいくずし字の学習も、楽しく簡単なものになるはずである。KuLA は三つの機能で構成されている――まなぶ機能、よむ機能、つなげる機能である。またフェースブックの「みんなで翻刻」という KuLA のオフィシャル・ページでは、くずし字を読むイベントなどの情報が掲載されている。

（平成二十九年二月　笠間書院　Ａ５判　九二頁　８００円＋税）